

研究タイトル：

イギリス近代劇の発達と社会的意味



| | | | |
|-----|-------------------------|---------|-----------------------------|
| 氏名： | 森川 寿 / MORIKAWA Hisashi | E-mail： | morikawa@wakayama-nct.ac.jp |
| 職名： | 教授 | 学位： | 博士(英語学) |

所属学会・協会： 日本バーナード・ショー協会、International Shaw Society

キーワード： バーナード・ショー,レパートリー・シアター

技術相談

提供可能技術：

- ・ 19世紀末から20世紀前半のイギリス演劇の展開
- ・ ヨーロッパの演劇運動におけるバーナード・ショーの役割
- ・ 劇場の社会的役割と演劇の上演形態の変遷

研究内容：

19世紀のイギリス演劇は芸術的価値が低く、娯楽の要素が強かった。大掛かりな仕掛けを売り物にし、アクター・マネージャーの男優の芝居を効果的に見せるために作品を改変することも日常茶飯事であった。シェイクスピアは大詩人として尊敬されていたが、劇場では、彼の劇も他の娯楽作品と同様に役者の演技を見せるための道具に使われていた。

ヨーロッパ大陸で19世紀の劇空間に革命をもたらしたのがワーグナーとイプセンであった。ワーグナーは、歌手の技巧を披露するための歌芝居に堕していたオペラを変革し、哲学的内容を盛り込んだ台本と、人物の心理を表して戯曲の意味を伝える音楽を融合した総合芸術を唱えて楽劇を創造した。一方、イプセンは、当時フランスで流行していた客間劇の型にはまった倫理観を洗い直し、演劇を娯楽の道具から観客の良心に問いかけ、社会的に影響を及ぼす芸術作品に高めた。『人形の家』でヒロインのノラが自己を見つけるために家庭を捨てていくラスト・シーンは、女性解放の波を全世界に広めるきっかけとなった。

イギリスでワーグナーとイプセンの運動を広め、近代劇への扉を開いたのがバーナード・ショーであった。ショーは、神話や中世伝説を基にしたワーグナーの楽劇を、近代社会を批判する寓話であると考え、自作ではイギリス社会にそれを置き換えて写實的に社会批判を展開し、個人の意識改革を図った。イプセンに始まる「新しい演劇」では、明らかな善玉や悪玉は登場せず、登場人物は各々の立場から意見を述べ、観客を巻き込みながら問題に対する理解を深め、決着をつけようとする。ショーはイギリスにおける「新しい演劇」の先頭に立ち、彼の戯曲が20世紀の英米の演劇を方向づけたと言っても過言ではない。実際、20世紀前半の劇作家のほとんどはショーの影響を受けている。

ショーが活躍した時代に、スター・システムからレパートリー・システムへと劇場の形態も変わった。演出は作品本位で、1人のスターのためではなく、アンサンブルを重視するようになった。現在、英米各地で開かれている芸術祭・演劇祭や、ショーの死後、1960年代に開設されたナショナル・シアターなど、作品を真に味わうための運動は、いずれも19世紀終わり頃に始まったものである。

演劇には、21世紀の現代でも娯楽的側面があるのは確かである。しかし、古代ギリシャ悲劇のように、社会の意味を考え、個人の倫理観に影響するような芸術作品もまた必要とされている。欧米においては、19世紀後半にその流れが革命的に発生し、日本を含めて全世界に波及して、現代への滔々たる流れとなっている。

提供可能な設備・機器：

| 名称・型番(メーカー) | |
|-------------|--|
| | |
| | |
| | |
| | |